

## 【論 文】

# 保育者養成校における学生の運動有能感と 運動指導の心配に関する研究： 学年の違いに着目して

川 口 諒・生 関 文 翔

A Study on Students' Physical Competence and Concerns  
about Movement Guidance at a Nursery School:  
Focusing on the Difference in Grade

Ryo KAWAGUCHI · Ayaka ISEKI

令和4年2月発行

児童教育支援センター年報 第16号 (2021)

長崎純心大学 児童教育支援センター

# 【論 文】

## 保育者養成校における学生の運動有能感と 運動指導の心配に関する研究：

学年の違いに着目して

川 口 諒・生 関 文 翔

A Study on Students' Physical Competence and Concerns  
about Movement Guidance at a Nursery School:  
Focusing on the Difference in Grade

Ryo KAWAGUCHI · Ayaka ISEKI

### 1. はじめに

現在、子どもの体力や運動能力の低下が問題となっている。これまで行われてきた「スポーツテスト」や「新体力テスト」のデータからも、昭和60（1985）年頃と比較すると、一部の項目を除いて現在の体力水準の方が依然低い状態であることが分かる（文部科学省、2012）。これは、都市化や少子化が進展したことによって、子どもたちにとって遊ぶ場所、遊ぶ仲間、遊ぶ時間の減少をもたらし、体を動かして遊ぶ機会が減少している現状（小林、2014）が影響していることが考えられる。そのため、体を動かして遊ぶ機会を保証することについて、家庭や地域だけでなく、幼稚園や保育所、認定こども園などが担う役割がより重要となっている。実際に、幼児期から多様な動きを経験させ運動能力の基盤を構築することが、生涯にわたって運動を親しむ資質・能力を育んでいくために重要であることは広く認知されており、体育を専門とする外部講師を招くなどして運動指導に熱心に取り組んでいる幼稚園なども多い。杉原ほか（2010）の調査によると、調査対象とした園の43%が保育時間内に体育を専門とする指導者によって運動指導を行っており、そこでは体操や器械運動、水泳などが多く指導されていることが明らかとなっている。しかしながら、運動指導の頻度が高い園よりも運動指導を行っていない園の子どもの方が、運動能力が高いことが報告されている（杉原ほか、2010）。このことから、外部の指導者による運動指導を行うよりも、保育者自身が日常の保育の中で多様な運動を経験させることが、子どもの運動能力の向上にとって重要であることが示唆される。

一方で、現場の保育者や学生の中に運動指導に対しての自信がなく不安に感じている者も多くいることが推測される。その中で、保育者や保育者志望の学生の運動有能感が運動指導に関係していることに言及している先行研究が見られる。例えば、中曽根（2018）は、

保育士の身体的有能さの認知と運動あそびとの関連性について検討しており、保育士の身体的有能さの認知の差によって、運動あそび時の子どもとの直接的な関わりや運動指導時の不安感や苦手意識、子どもの体力・運動能力向上に向けた取り組みや意識に影響を及ぼすことを明らかにしている。また、日比（2019）は、保育者志望学生の運動有能感と運動指導への自信や意識との関連について検討しており、運動有能感は主観的な運動指導への自信感、運動遊びに対する意識や、運動指導に関する理解など、運動への態度や意識や運動指導に対する意識にも大きな影響を及ぼしていることを明らかにしている。加えて、日比（2019）は、過去のスポーツ歴の有無が運動有能感、主観的な運動指導への自信感に影響を及ぼすことも明らかにしているが、大学の授業や教育実習の経験によっても運動指導に対する自信に影響を及ぼす可能性があることも考えられる。

そこで、本研究では保育者養成校の学生の運動有能感と運動指導の心配について学年間の違いを明らかにすることを目的とする。さらに、これまでの先行研究と同様に運動有能感と運動指導の心配の関連性についても検討を行う。

## 2. 研究方法

### 2.1. 調査対象および調査時期

本学では、幼児期の運動指導に関わる授業科目として、「からだ育ての基礎」（1年次）および「体育あそびの研究」（3年次）の2科目が開講されている。なお、「からだ育ての基礎」は、幼稚園教諭一種免許および保育士資格を取得するための必修科目として設定されており、「体育あそびの研究」は、幼稚園教諭一種免許取得要件の必修科目、保育士資格取得要件の選択科目に設定されている。本調査は、2021年度に開講されたこれらの科目を受講した1年生と3年生の受講生を対象とした。そのうち、本調査の実施に同意した197名（1年生93名、3年生104名）から回答を得た。「体育あそびの研究」は3年次前期、「からだ育ての基礎」は1年次後期に開講されており、3年生に対する調査は2021年7月～8月、1年生に対する調査は2021年9月に実施した。

### 2.2. 調査内容および調査方法

対象者の属性として、学年、これまでのスポーツ経験の有無（体育授業は除く）、これまでに実施した実習について回答を求めた。加えて、運動有能感および運動指導の心配に関する質問項目についても回答を求めた。

運動有能感については、筒井ほか（1996）で用いられている質問項目を援用した。これは、「体力はある」「健康には自信がある」「運動は得意」「すぐにうまくなる」「運動が好き」「仲間と仲良く運動ができる」「挑戦するのが好き」「楽しめる」「活動的である」の9項目から構成されている。これらの項目について、「あなた自身についてどのように感じているか」、「とても当てはまる」（4点）から「まったく当てはまらない」（1点）の4段階で回答を求めた。

運動指導の心配については、木原・松田（2002）の「体育授業を教える事の心配」についての項目を参考に、保育者志望学生への質問に適する項目に一部修正して調査を行った。具体的には、表1に示す通り11項目を設定し、それぞれ「とても心配だ」（4点）から「まったく心配ではない」（1点）の4段階で回答を求めた。また、これらの項目を「保育者として教える課題（1、3、4、6、8、9）」と「子どもを把握する課題（2、5、7、10、11）」の2つに分類した。

これらの調査内容について、Google Forms を用いて質問紙を作成し、授業時間内に調査協力の依頼、回答の収集を実施した。なお、回答の結果や調査への同意の有無によって授業の評価には一切影響がないこと、個人が特定されないように回答を加工し統計的に処理を行うこと、一度同意したとしても後で調査への参加を撤回できることについて、口頭及び書面で説明を行い、調査への同意を得た。

**表1 運動指導の心配についての調査項目**

【保育者として教える課題】	
1	子どもが安全に運動できる
3	幼児期に身につけたい基本的な動きについて理解している
4	自分が模範を示せない運動を教える
6	子どもの行動をコントロールできる
8	運動用具の準備や運動施設の管理ができる
9	子どもの発達段階にあった運動の内容を考えることができる
【子どもを把握する課題】	
2	運動の苦手な子どもへの配慮ができる
5	指導中に1人1人の子どもを把握できる
7	子どもたちの運動のつまずきを診断する
10	子ども同士の協力的な関係をつくる
11	いろいろな子どもたちのニーズに合わせる

### 2.3. 分析方法

得られたデータは、SPSS Statistics ver.22を用いて以下の分析を行った。運動有能感と運動指導の心配についての学年間の平均値の比較には、対応のないt検定を用いた。また、運動有能感の各項目の合計得点の合成変数を作成し、平均値を基準として運動有能感の低群と高群の2群に分類し、各群間の運動指導の心配についての平均値の比較をするために、対応のないt検定を行った。なお、有意水準は5%未満とした。

### 3. 結果と考察

#### 3.1. 対象者の属性

回答者197名のうち、1年生が93名(47.2%)、3年生が104名(52.8%)であった。また、1年生はまだ実習を経験しておらず、3年生は幼稚園教育実習や保育所実習などを経験していた。このことから、学年の違いが実習経験の有無と同じ意味を持つと考えられる。

また、スポーツ経験については、これまでにスポーツの経験がある学生が169名(85.8%)、経験がない学生が28名(14.2%)と、ほとんどの学生がスポーツの経験を有していた。日比(2019)は、過去のスポーツ経験が運動有能感や運動指導への自信感に影響を及ぼすことを報告しているが、本研究では、対象者の偏りが大きすぎるため、スポーツ経験の有無を独立変数とした分析は実施しなかった。

#### 3.2. 学年の違いによる運動有能感と運動指導の心配の特徴について

まず、学年間で運動有能感の平均値に対して対応のないt検定を行ったところ、すべての項目において有意な差は見られなかった。また、項目全体の平均値においても有意な差は見られなかった。各項目と全体の結果を表2に示している。

また、学年間で運動指導の心配の平均値に対して対応のないt検定を行ったところ、「幼児期に身につけたい基本的な動きについて理解している」の項目にのみ有意な差が認められた( $p < .05$ ) (表3)。つまり、1年生よりも3年生の方がこの項目について、より心配に感じていることが示された。これは、体育あそびの研究の授業の中で、幼児期運動指針ガイドブック(文部科学省, 2012)に示されている幼児期に経験する基本的な動きの例を紹介したことが、3年生にとってこの基本的な動きをより意識させた可能性が考えられる。幼児期運動指針ガイドブックには、約30の基本的な動きが例示されているが、授業で詳しく解説したものはその中の一部のみだったため、その他の動きについては十分に理解ができておらず、まだ基本的な動きについて全く理解していない1年生と比べると、3年生の方がより心配に感じた学生が多かったことが推察される。

これらの結果から、学年の違いが学生の運動有能感や運動指導の心配に与える影響は大きくないことが考えられる。3年生は1年生と比べて、幼児教育に関する様々な授業科目を履修したり幼稚園や保育所で実習を実施したりしているが、それらの経験による運動有能感や運動指導の心配への影響があまりないことが示唆された。保育者の養成課程では、幼児期の子どもに対する運動指導に関する授業科目の少なさが指摘されている(池田, 2007)。本学においても本研究で対象とした2科目のみであり、限られた科目数、時間の中で運動指導の知識や技能を習得させる工夫が必要である。

また、幼稚園の教育実習における運動遊びの指導機会の少なさも指摘されている(三浦・市川, 2017)。三浦・市川(2017)は、幼稚園の教育実習を実施した107名の学生を対象として調査を実施し、実習生が行った部分実習の内容のうち、運動遊びは全体の6%にしか見られなかったことを報告している。本研究の対象者の状況を調査していないが、幼稚園

表2 学年と運動有能感との関係

	1年生		3年生		t 値	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
1 体力がある	2.54	0.82	2.60	0.70	-0.54	n.s.
2 健康には自信がある	3.15	0.71	3.05	0.61	1.08	n.s.
3 運動が得意だ	2.70	0.92	2.54	0.96	1.20	n.s.
4 すぐにうまくなる	2.44	0.80	2.35	0.81	0.82	n.s.
5 運動が好きだ	3.25	0.83	3.20	0.79	0.39	n.s.
6 仲間と仲よく運動ができる	3.43	0.67	3.36	0.68	0.77	n.s.
7 挑戦するのが好きだ	2.91	0.80	3.02	0.78	-0.93	n.s.
8 運動を楽しめる	3.40	0.75	3.29	0.76	1.01	n.s.
9 活動的だ	3.11	0.85	3.07	0.84	0.33	n.s.
全体	2.99	0.60	2.94	0.60	0.60	n.s.

n.s.: not significant

表3 学年と運動指導の心配との関係

	1年生		3年生		t 値	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
保育者として教える課題	2.28	0.53	2.35	0.50	-1.07	n.s.
1 子どもが安全に運動できる	2.31	0.77	2.31	0.75	0.04	n.s.
3 幼児期に身につけたい基本的な動きについて理解している	2.23	0.69	2.46	0.59	-2.55	*
4 自分が模範を示せない運動を教える	1.97	0.84	2.11	0.81	-1.17	n.s.
6 子どもの行動をコントロールできる	2.13	0.70	2.17	0.77	-0.42	n.s.
8 運動用具の準備や運動施設の管理ができる	2.67	0.81	2.57	0.82	0.85	n.s.
9 子どもの発達段階にあった運動の内容を考えることができる	2.35	0.72	2.51	0.78	-1.46	n.s.
子どもを把握する課題	2.34	0.64	2.37	0.53	-0.32	n.s.
2 運動の苦手な子どもへの配慮ができる	2.40	0.78	2.36	0.71	0.39	n.s.
5 指導中に1人1人の子どもを把握できる	2.12	0.76	2.26	0.74	-1.32	n.s.
7 子どもたちの運動のつまづきを診断する	2.30	0.73	2.23	0.66	0.71	n.s.
10 子ども同士の協力的な関係をつくる	2.45	0.85	2.62	0.84	-1.35	n.s.
11 いろいろな子どもたちのニーズに合わせる	2.45	0.85	2.39	0.67	0.52	n.s.
全体	2.31	0.56	2.36	0.48	-0.74	n.s.

n.s.: not significant \* : p &lt; 0.05

や保育所での実習を経験したとしても、その中で運動指導を経験している学生が少なく、運動指導の心配の解消につながっていないことが予想される。

### 3.3. 運動有能感の違いによる運動指導の心配の特徴について

運動有能感のすべての項目の平均値を基準にして、運動有能感の高群と低群の2つの群にすべての対象者を分けたところ、高群の学生が111名、低群の学生が86名となった。その各群間の運動指導の心配の各項目の平均値に対して対応のないt検定を行ったところ、「自分が模範を示せない運動を教える」「運動用具の準備や運動施設の管理ができる」「子ども同士の協力的な関係をつくる」「いろいろな子どもたちのニーズに合わせる」の項目

において有意な差が認められ ( $p < .05$ )、いずれの項目においても低群よりも高群の方が心配に感じていることが示された (表4、図1)。また、「保育者として教える課題」と全体においても有意な差が見られ、低群よりも高群の方が心配に感じていることが示された (表4、図2)。

このように、全体の平均値が低群よりも高群の方が高かったことから、運動有能感の高い学生の方が運動有能感の低い学生よりも運動指導に対して心配を抱いていることが明らかとなった。中曽根 (2018) は、保育士に対して運動有能感の因子である身体的有能さの認知の高群と低群で運動遊びについての認識に違いがあるか調査を行い、身体的有能さの認知の高群がすべての項目において高い値を示したことを報告している。この結果は、本研究の結果とは異なり、運動有能感の高い者の方が運動指導に対する自信を持っていることを示している。中曽根 (2018) の調査は、保育士を対象としたものであり、日常的に子どもたちと運動遊びを行う中で、その豊富な経験から有能感の高い保育士がさらに有能感を高めていることが推察される。一方で、本研究の対象者である学生は実習を経験している学生がいるものの、運動指導に関しては、子どもと関わる経験が豊富ではなく、運動有能感の高い学生の方が運動指導についてのイメージを持ちやすく、より心配に感じる傾向にあるのではないかと考えられる。実際に、木原・松田 (2002) の報告でも、教育実習前よりも教育実習後の方が心配が増大している項目が多くみられている。これは、実際に教育実習を通して子どもと関わったり、子どもに指導をしたりすることで、その難しさをより自分事としてイメージした結果であると考えられる。

表4 運動有能感と運動指導の心配との関係

	低群		高群		t 値	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差		
保育者として教える課題	2.23	0.50	2.39	0.51	-2.22	*
1 子どもが安全に運動できる	2.21	0.65	2.39	0.82	-1.69	n.s.
3 幼児期に身につけたい基本的な動きについて理解している	2.33	0.69	2.37	0.62	-0.46	n.s.
4 自分が模範を示せない運動を教える	1.91	0.81	2.14	0.83	-2.02	*
6 子どもの行動をコントロールできる	2.09	0.63	2.20	0.81	-1.03	n.s.
8 運動用具の準備や運動施設の管理ができる	2.45	0.71	2.74	0.87	-2.53	*
9 子どもの発達段階にあった運動の内容を考えることができる	2.37	0.70	2.49	0.78	-1.08	n.s.
子どもを把握する課題	2.29	0.53	2.41	0.62	-1.56	n.s.
2 運動の苦手な子どもへの配慮ができる	2.38	0.74	2.37	0.75	0.13	n.s.
5 指導中に1人1人の子どもを把握できる	2.13	0.72	2.24	0.78	-1.08	n.s.
7 子どもたちの運動のつまづきを診断する	2.24	0.65	2.28	0.73	-0.36	n.s.
10 子ども同士の協力的な関係をつくる	2.40	0.79	2.65	0.88	-2.13	*
11 いろいろな子どもたちのニーズに合わせる	2.28	0.68	2.53	0.81	-2.38	*
全体	2.25	0.48	2.40	0.53	-2.01	*

n.s.: not significant \* :  $p < 0.05$

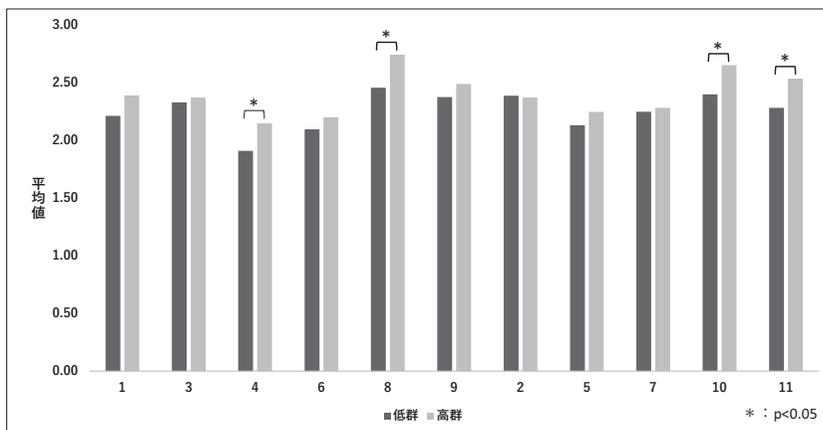


図1 運動有能感の高・低群別にみた運動指導の心配 (項目ごと)

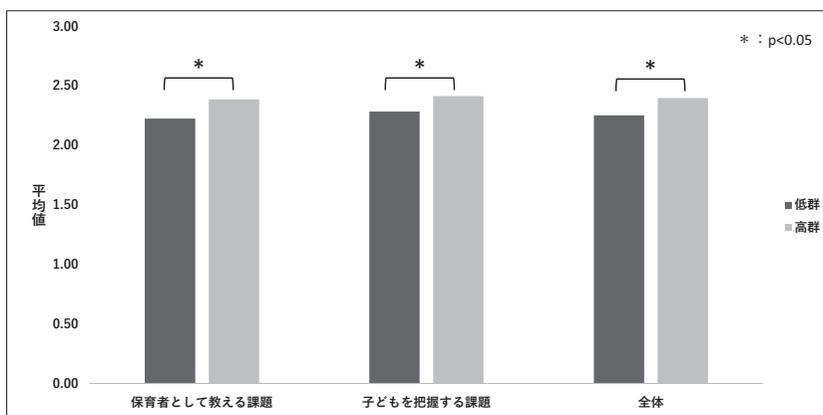


図2 運動有能感の高・低群別にみた運動指導の心配 (課題別、全体)

#### 4. 今後の展望と本研究の課題

本研究の結果では、学年の差、つまり保育者の養成課程における授業や実習などの経験によって運動有能感や運動指導の心配に違いが見られなかった。これは運動指導に関する授業科目の少なさや実習における運動指導の機会の少なさが原因であることが示唆された。その一方で、これまでの先行研究と同様に、運動有能感の違いが運動指導の心配に対して影響していることが明らかとなった。そのため、保育者の養成課程において学生の有能感を高める手立てを講じる必要があると考えられる。丸井・井邑 (2015) は、グループ学習を通して幼児への運動遊びの指導を行ったところ、保育者志望学生の運動有能感を高めることができたことを報告している。これまでの運動経験だけに依存しない運動有能感の形成が重要となってくるだろう。

他方で、小学生や中学生に対して行われるような技術習得を目的とした指導者主導の一斉指導である「小型化」した運動指導は、幼児期の運動指導には適さないことが指摘され

ている(杉原, 2014)。先にも述べた、杉原ほか(2010)の指摘から考えれば、本研究では、小学校の体育授業を实践するうえでの心配についての調査を参考にして質問項目を設定したが、幼児期の子どもに対する運動指導で求められる保育者の役割とは異なる視点での調査になっている可能性が考えられる。そのため、保育者に求められる運動指導の資質能力について調査を行う必要があると同時に、そこで明らかとなった学生の実態に即して、学生の資質能力を育成していく必要があるだろう。

## 引用・参考文献

- 日比健人(2019) 保育者志望学生の運動有能感と運動指導への自信や意識・主観的健康度との関連性について. 夙川学院短期大学研究紀要, 46: 37-48.
- 池田裕恵(2007) いま, 何故「幼児体育か」: 子どもの身体活動およびその指導について考える意義とその方向. 子どもと発育発達, 5(1): 4-9.
- 木原成一郎・松田泰定(2002) 教育実習生の体育科指導における心配に関する調査研究. 学校教育実践学研究, 8: 1-8.
- 小林寛道(2014) 幼児期運動指針とは?. 日本発育発達学会編, 幼児期運動指針実践ガイド. 杏林書院, pp. 1-14.
- 丸井一誠・井邑智哉(2015) 女子短大生における幼児への運動遊びの指導に関するグループ学習の効果: 運動有能感と心配に着目して. 金沢星稜大学人間科学研究, 9(1): 31-34.
- 三浦累美・市河勉(2017) 幼稚園教育実習における運動遊びとその指導に関する研究. 松山東雲短期大学研究論集, 47: 117-116.
- 文部科学省(2012) 幼児期運動指針ガイドブック. [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/sports/undousisin/1319772.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/undousisin/1319772.htm), (参照日2021年11月10日).
- 中曾根裕(2018) 保育士の身体的有能さの認知と運動あそびとの関連性. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集, 19: 155-164.
- 杉原隆(2014) 幼児期の発達的特徴に応じた運動指導のあり方. 杉原隆・河邊貴子(編) 幼児期における運動発達と運動遊びの指導. ミネルヴァ書房, pp. 45-64.
- 杉原隆・吉田伊津美・森司朗・筒井清次郎・鈴木康弘・中本浩輝・近藤充夫(2010) 幼児の運動能力と運動指導ならびに性格との関係. 体育の科学, 60(5): 341-347.
- 筒井清次郎・杉原隆・加賀秀夫・石井源信・深見和男・杉山哲司(1996) スポーツキャリアパターンを規定する心理的要因: Self-efficacy Model を中心に. 体育学研究, 40(6): 359-370.